

Av. *mazdā*- 再考

堂 山 英次郎

はじめに

ゾロアスター教の最高神は Ahura Mazda 「アフラ・マズダー」として知られる。本来 Av.¹⁾ *ahura*- は「首長, 主人」 (=Ved. *ásura*-) を意味する普通名詞であり²⁾, *mazdā*- が固有名にあたる。*mazdā*- は Ved. *medhā*- 「智慧, 賢さ」と同様 (両語の関係については本論参照), 「思考」を意味する中性名詞 PII **m̥s-* (~ **māns-/mánas-* → Av. *manah*-, Ved. *mānas*-) と動詞 **d^hā* (> Av. *dā*, Ved. *dhā*) 「置く, 定める」に遡り³⁾, 一般に wisdom, Weisheit 「知恵, 賢さ」(実体詞) または wise, weise 「知恵ある, 賢い」(形容詞) と訳される。しかし一方で, この語に関する根本的な問題, 即ち, ①元にある動詞表現 **m̥s/māns/mānas d^hā* はそもそも何を意味していたのか — つまり「賢さ」や「賢い」は如何なる動詞的意味に由来するのか —, そして② Av. *mazdā*- は実体詞 (行為名詞) なのか形容詞 (行為者名詞) なのかについては, 語形・語義の両面において包括的調査・検討は未だ為されていない。これらが解明されなければ, ゾロアスターがその宗教改革において何を絶対的原理としたのかという, 同宗教の基本的理解は足場を欠いたままであろう。本論では, 既に行った①に関する研究結果を踏まえた上で, ②をインド・イラン共通文化という視点から語形, 語義, 思想的背景に亘って再検討し, 神名 *mazdā*- は本来「[正しい] 決定・決断 (を為すこと)」(以下代表して「[正しい] 決断」とすることがある), またはこれから発展した「知恵, 賢さ; 理性」⁴⁾ を意味する行為名詞・抽象名詞 (実体詞) であり, 最高神 Mazda はその神格

1) 主な略号: AV[Ś/P]: Atharvaveda-Saṁhitā (-Śaunaka/-Paippalāda [Kashmir]), APar: Atharvaveda-Parīṣiṣṭa, MS: Maitrāyaṇī Saṁhitā, Nigh.: Nighaṅṭu, Pp.: Padapāṭha, RV: Ṛgveda-Saṁhitā, ŚB: Śatapatha-Brahmaṇa, TS: Taittiriya-Saṁhitā, TB: Taittiriya-Brahmaṇa, Y: Yasna, Yt: Yašt, Vr: Visprad, Vd: Videvdād, YH: Yasna Haptaṅhāiti; PII: Proto-Indo-Iranian, Ved.: Vedic, [O/Y]Av.: [Old/Young] Avestan, OP: Old Persian.

2) 元の意味が窺える箇所として, 例えば Y 29, 1 (主人, 所有者), Yt 5, 85; 14, 39; 19, 77 (族長, 王); RV I 126, 2, X 93, 14 (族長, 王, パトロン) など。

3) PII **dā* 「与える」も可能だが, 以下見るように, この動詞表現の意味やその派生諸語 (Av. *mazdā*-, [-]*mazdra*-; Ved. *medhā*-, *médhira*-, *mandhātār*-) の形態的・意味的対応から, PII **d^hā* が同定される。

4) 以下本論では Av. *mazdā*- に「知恵」を, また含意や文脈の異なる Ved. *medhā*- には「智慧」を便宜的に用いる。「知恵/智慧」は, 例えば「物事の理を悟り, 適切に処理する能力」(『広辞苑』第5版) ほどの意味で用いる。*mazdā*- の含意する「理性」については VI を参照。

化であったことを明らかにする。

I 動詞 *mans d^hā

古アヴェスタ語には、語形上 *mazdā-*の派生元と思われる動詞表現（複合動詞）*maz-dā* (<*m^hys-d^hā) と、その異形 *mān̄/mān̄/mas(-)dā* (<*mans d^hā) が例証される。動詞語形としては後者が本来的な形であり、一例回収される *maz-dā* は名詞 *mazdā-*の影響を受けた語形と判断される [Dōyama 2013: 93]⁵⁾。これらの動詞語形及び関連諸語彙について統語法と意味の観点から検討を行った結果、以下の諸点が明らかとなった [Dōyama in Press 2] :

mān̄/mān̄/mas(-)dā (5x), *maz-dā* (1x) の用例は全て中動態で活用するか、またはそれを前提とする (: inf. OAv. *mān̄-cā/mān̄-daⁱdiiāi*, cf. *mazdātaiaēca* → II, 4)。主語は殆どがゾロアスターやその信徒であり、目的語 (acc.) または目的節は *Mazdā* によって定められた教義 (の言葉) 等で、動詞表現全体は「～に (acc.), 思考・思い・注意を向ける」を意味する。その際、*mān̄/mān̄/mas(-)*, *maz-*は本来 *māns-「思考」の acc. sg. であり、*dā* の直接目的語であったと解される。一方で「思考を向ける」対象である二つ目の acc. は、本来的に目的地の acc. であったか、もしくは元々別の格 (loc.) であったものが、*māns と *d^hā の複合化に伴い acc. を取るようになったかのいずれかと解釈される。

*māns-の異形 *mānas-を用いたヴェーダ語の対応表現 *mānas dhā* には中動・能動の二種の態が存在するが、そのうち中動態だけがアヴェスタ語の表現に対応して「～に思いを向ける」等を意味する⁶⁾。能動態は AV 以降で見られ、祭式の遂行やマントラの朗唱を受けて神々が、或いはそれらの効用として祭官・祭主が「(人・生き物の中に : loc. [/dat.]) 思考機能・思考能力を置き定める」を意味する⁷⁾。それによって人・生き物は理想的な・然るべき存在になり、また祭主は望みを叶えたとされる。これを踏まえると、古アヴェスタ語に唯

5) 同様に名詞派生では *maz-*が本来であり、幾つかの派生名詞 (Av. [-] *mazdra-*, Ved. *mandhātār-*) が示す *mans-の形は、動詞語形からの影響と考えられる [Dōyama 2013: 94f.]。

6) ただし「思いを向ける」対象は loc. で表され、指示内容は人か物である。特に男女間の愛情表現 (≒「思いを馳せる」) に使われることが多い。また loc. 以外にも、行為名詞の dat. とともに「～することに意を傾ける ; ～しようと意図する」を意味する。Av. *manah dā* に同様の意味で用いる中動態の例はない。

7) 例えば : MS IV 7, 1 : 94, 6-7^p (Soma 祭) *māno vai savitā. vaiśvadevīr imāḥ prajāḥ. sāvāsu vā etāt prajāsu māno dadhāti* 「Savitar は思考なのだ。これらの生き物たちは、一切神に属する。これにより (一切神に属する一献を Savitar に属する杯の中に汲むことにより) 全ての生き物たちの中に、思考を彼は置き定めるのだ」 ; TS II 1, 3, 2^p (願望祭) = 2, 8, 1-2^p *indriyēna vai manyūnā mānasā saṃgrāmaṃ jayati. indram evā manyumāntam mānasvantam svēna bhāgadheyenōpa dhāvati. sā evāsmiṇ indriyām manyūm māno dadhāti. jāyati tām saṃgrāmām* 「Indra 的力、激情、思考によって、合戦に [祭主は] 勝つのだ。激情、思考を備えた、他ならぬ Indra に、自身の分け前を伴って [祭主は] 走りすぎる。彼 (Indra) は、彼 (祭主) の中に、Indra 的力、激情、思考を置き定めることになる。その合戦に、彼 (祭主) は勝つ」。

一例証される能動態の *manah dā* (Y 48, 4) にも「(Mazdā / 邪悪な存在が人の中に) より良い / より悪い思考を置き定める」の意味が想定される。

語根名詞や行為者名詞の形態統語論的特徴が明示するように, Av. *mazdā*-, Ved. *medhā*-, *mandhātār*-等 **māns dʰā* の派生語は, 中動態ではなく能動態の意味を代表していると考えべきである。その際上記の原義「(～の中に) 思考機能・思考能力を置き定める」は, 個別の対象(人・生き物)の含意や, 厳格な能動態の含意を多かれ少なかれ弱め, 「(何かに関して) [正しい・まともな] 思考を置き定める」つまり「[正しい] 決定・決断を為す」の意味に一般化したと考えられる。これにより, **māns dʰā* の派生語に設定される「賢さ; 賢い」等の語義は, 本来「[正しい] 決定・決断が出来る賢さ・出来る者」に由来するものとして説明出来る。

動詞か名詞かで議論のある Y 30, 1 (*tā ... yā*) *mazdāθā* は, 能動態の動詞形 (aor. subj. 2pl.) としては理解が難しく, 接尾辞 *-*tʰa*-による派生語 *mazdāθa*-の neut. nom./acc. pl. として, 「[正しい] 決断・判断を為す / 知恵に富む [言葉 / 事々] たち」等の意味が想定される。

II Av. *mazdā*-及び関連語彙

Av. *mazdā*-の語義については古くから断続的に議論されてきたが, 主たる論点は, この語が実体詞「知恵, 賢さ」なのか形容詞「知恵ある, 賢い」なのか, つまり Ahura Mazdā は本来「知恵 / 賢さである主」なのか⁸⁾, それとも「知恵ある / 賢い主」なのか⁹⁾, という問題であった。*mazdā*-の意味を語源に遡って説明する場合には, 常に動詞 *mān / mān / mān(-)dā*, *maz-dā* との関係性が注目され, 自ずと中動態の意味「注意を向けること」「注意深い; 気がつく」等だけが想定されてきた¹⁰⁾。しかしながら, 上記 I に見たように, *mazdā*-の背景にあるのはヴェーダ語に傍証される能動態の意味「[正しい] 決断を為す」である。よって「知恵, 賢さ」か「知恵ある, 賢い」かという議論は, 「[正しい] 決断」(行為名詞・実体詞) か「[正しく] 決断する [者]」(行為者名詞・形容詞) かという問題に置き換えられる。以上の理解と問題設定の中で, 唯一神の名 Mazdā の成立とその性質は再検討されるべきである。

8) 語形と語義の両面から扱った代表的な研究に Konow 1937: 219f., Thieme 1970: 406ff.; これら以前及び 1975 年までの実体詞説については反論者である Kuiper 1976: 25+n. 1-5 に詳しい。それ以降では Oberlies 1989: 86, n. 64, Mayrhofer EWAia II 378 など。Hoffmann/Forssman 2004: 124 は, 女性の語根抽象名詞が神格化に伴い形容詞化した [cf. Humbach 1957: 83; ただし Thieme op. cit.: 409f.] と考えているように見える。

9) Humbach 1957: 84ff., Kuiper 1957: 91ff., 1976: 27ff., Humbach 1959, Humbach et al. 1991 の随所, また次注 Kellens 以降及び注 24 の諸文献も参照。

10) Humbach 1957: 84ff., Kuiper 1957: 92+n. 23., Kellens 1974: 203, Kellens & Pirart 1990: II 283, Humbach et al. 1991: II 18, 60, etc.

1. ゴロアスター教の最高神を表すのに用いられる OAv. *mazdā-*は、以下の活用を示す：

| | | | |
|---|------|--------------------|---------------------------------|
| nom. <i>mazdā</i> (O/YAv.) | 2 音節 | <* <i>mazdā-s</i> | <* <i>mazd^hāH-s</i> |
| voc. <i>mazdā</i> (OAv.), <i>mazda</i> (YAv.) | 2 音節 | <* <i>mazdā</i> | <* <i>mazd^haH</i> |
| acc. <i>mazdaqm</i> (O/YAv.) | 3 音節 | <* <i>mazdā-am</i> | <* <i>mazd^haH-am</i> |
| instr. <i>mazda</i> (YAv.) | 3 音節 | <* <i>mazdā-ā</i> | <* <i>mazd^haH-aH</i> |
| dat. <i>mazdāi</i> (O/YAv.) | 3 音節 | <* <i>mazdā-ai</i> | <* <i>mazd^haH-ai</i> |
| abl. <i>mazdā</i> (YAv.) | 3 音節 | <* <i>mazdā-as</i> | <* <i>mazd^haH-as</i> |
| gen. <i>mazdā</i> (O/YAv.), <i>mazdās-cā</i> (OAv.) | 3 音節 | <* <i>mazdā-as</i> | <* <i>mazd^haH-as</i> |

既知のように、それぞれの語形には Gaθa の韻律の要請に従い上記の音節数が了解される。これは、acc.以下の-ā-に始まる格語尾の前で、語幹末の laryngeal が音節の区切りとして機能していた名残りとしてのみ理解可能であり、同時にこの語が動詞語根 *dā* 「置く、定める」を後分とする語根複合語（語根名詞）であることを意味する [Kuiper 1957: 91ff., Kellens 1974: 201f.]。インド・イラン語派に残る語根複合語の ablaut は語根構造により様々であるが、-a-+単子音 (*-aH-を含む)に終わる語根の場合、nom. sg. は（語根部分の）*e*-延長階、他の強語幹は *e*-標準階（いずれも+アクセント）、弱語幹はゼロ階（-アクセント）を示していたと考えられる [Schindler 1979: 60, Scarlata 1999: 733f.]: nom. sg. *-āH-s, acc. sg. *-aH-m, dat. sg. *-H-ai, etc.¹¹⁾。しかし *mazdā-*のパラダイムは ablaut を示さず、全活用が強語幹で均一化されている¹²⁾。特に-ā-に終わる語根の場合、恐らく弱語幹形における（特に子音で始まる語尾の前で）語根構造の保ち難さから、インド・イラン共通時代の早い段階で（・元々）*mazdā-*のように ablaut を捨て（・持たず）、強語幹を貫徹する方向に傾いていたと考えられる¹³⁾。

*mazdā-*が語根複合語（語根名詞）であるということは、その語義について何ら示唆を与

11) 多く例証される行為者名詞から（行為名詞は以下参照）: YAv. *raθaē-štā*-「戦車に立つ=戦士」: nom. sg. *raθaē-štā* (<**rat^hai-štāH-s* = Ved. *rathe-ṣṭhā-s*) ~ dat. sg. *raθōi-št-e* <**štH-ai* (*mazdāi* と同様 *raθaē-štāi* <**štāH-ai* もある), 更に nom. pl. *zraz-dā* (3 音節 <**d^hāH-as*) 「信を置く・信ずる者たち」: Ved. *dhiyam-dhā*-「思慮を置き定める」: nom. sg. *dhā-s* ~ dat. sg. *dh-é*; *anaq-vāh*-「荷車を曳く=役畜」: acc. sg. *vāh-am* ~ loc. pl. *ūt-su*; *dasyu-hán*-「敵を殺す [者]」: nom. sg. *há* ~ acc. sg. *hánam* ~ instr. sg. *ghn-á* 等。

12) Wackernagel/Debrunner AiG II-2 35, Scarlata 1999: 733; 他に YAv. *vaṇhu-ḍā-biō* (*yazataēbiō*: m. dat. pl.) 「品々を与える [讃えるべき] 者たちに」, YAv. *akō.dā-biš* (*daēnuāiš*: m. instr. pl.) 「悪事を創り出す [ダエーワ] たちと」; 実体詞に YAv. *viā-daⁱ-biš* (instr. pl.) 「分配の品々とともに」; Ved. *agre-pā-bhis* (m. instr. pl.) 「最初に飲む [者] たちと」, Ved. *bhūri-dā-bhyas* (m. abl. pl.) 「多くを与える者たちよりも」等。

13) ただし、本来の-āH-が広まったのか (-ā'am, etc.), 或いは二次的に nom. sg. の強語幹形-ā-が音節の切れ目を保ったまま広まったのか (-ā'am, etc.) は判別出来ない [cf. Kuiper 1957: 92]。

えない。語根名詞は本来行為名詞（実体詞）でも行為者名詞（形容詞）でもあり得る。確かにインド・イランに共通の傾向として、*-ā*-に終わる女性語根名詞（*-ā*-< **-aH-*）の多く——特に行為名詞——は、既に早い時期から女性*-ā*-語幹（*-ā*-< **-ah₂-*）活用に移行しており¹⁴⁾、語根活用は専ら行為者名詞に色濃く残る傾向がある [Lanman 1877: 444f, Wackernagel/Debrunner AiG II-2 38, 37; III 126] (→ 注 11)。しかし、ヴェーダ語古層を中心に僅かに残る行為名詞（実体詞）の語根活用は、元々品詞や意味に応じた活用の区別が無かったことを証言する：*ni-drā*[-s] (nom. sg., RV VIII 48, 14: 母音の前で)「まどろみ」、*pra-pā*[-s] (nom. sg., RV X 4, 1: 母音の前で)「飲み物」(cf. AV *pra-pā* nom. sg.)¹⁵⁾、*pra-m-é* (dat. sg., RV IX)「測量のために」(?)¹⁶⁾ (cf. RV X *pra-mā* nom. sg.「尺度, 韻律」; *prati-mā*「手本, 原型」と並んで)¹⁷⁾。アヴェスタ語で、語根複合語の行為名詞としては恐らく唯一古活用（の痕跡）を残す OAv. f. *ādā*- (YAv. *ādā*-, *adā*-: < **-d^haH-*)「献呈 [の品]」は、上に見た強語幹による平均化と女性*-ā*-語幹の両方向に踏み出している点で興味深い: nom. sg. *ā-dā* (女性*-ā*-語幹活用; 2音節), instr. sg. *ā-dā* (< **ādāH-aH*; 3音節), loc. sg. *ā-dāi* (< **ādāH-ai*¹⁸⁾; 3音節), loc. pl. *adāhū* (以下 YH 40, 1 参照)。

つまり語形成の点のみ考えると、神名の *mazdā*- の原義は「[正しい] 決断」または「[正しく] 決断する [者]」のいずれでもあり得ることになる。

2. 一方で、*mazdā*- の品詞をほぼ特定出来る用例が Yasna Haptañhāiti (YH) に 1 例見られる¹⁹⁾: Y 40, 1 *mazdqm* はアヴェスタ語で唯一神名として用いられていない [Narten 1986: 270f.]: Y 40, 1 *āhū at pa'ti adāhū mazdā ahurā mazdqmčā bū'ricā kər'suuā rā'ti tōi xrapa'ti ahmat hūqt a'bi hūqt mīzdm + mauua'iθim fradadāθā daēnābiiō mazdā ahurā*「次に、ここにある諸々の献呈 [の品] に際して、主なる Mazdā よ、[正しい] 決断/知恵と、多くの/優れたこと [ごと] とを、自らにつくり出せ。君の気前良さによって姿を取るがよい、我々から [力が] 及ぶ分だけ、私の如き者への報酬として、主なる Mazdā よ、諸々の [正しい]

14) 語根行為者名詞（形容詞）が女性名詞にかかる時も、同様に女性*-ā*-語幹への移行が見られる [cf. Gotō, 2013: 19f., n. 52], e. g. Vd 6, 30 *aētañā āpō ... armaēštaiiā* gen. sg.「この滞った水の…」。

15) RV-Pp. *nīdrā*, *prapā* はいずれも二次的な解釈に基く: 語末の*-ā* と後続母音の Sandhi は RV でほぼ一貫しており, hiatus を示す場合は*-ā-s* が理解される [Lanman 1877: 355f., 444f., Oldenberg 1888: 385(f.) + n. 1]。例外の 4 例についても前 2 書同箇所を参照 [cf. Scarlata 1999: 312]。

16) または inf.? ただし inf. *prati-m-ai*「瓜二つに測る・模倣するために」[Scarlata 1999: 377-379, 737]。

17) Instr. sg. *-ā*< **-H-eh₁* の例はいずれも確定的でない [Gotō 2013: 20+n. 53, cf. Lanman 1877: 447]。

18) Humbach 1957: 83, n. 7. Hoffmann/Forssman 2004: 124: 後者 loc. cit. 及び Kuiper 1957: 94: 1976: 28 は *ādāH-i* を (も) 想定 [cf. Gotō 2013: 14]。

19) YH は典礼における信徒の言葉から成り, Gaθā と殆ど変わらない方言を示す [Narten 1986: 20f.]。

見解に対して君が提供した [ものが]²⁰⁾。 *mazdqm̄cā bū'ricā kər'suuā* の解釈は難しいが、最も自然な解釈は *mazdqm̄* と *bū'ri* とを *-cā* で繋がれた2つの目的語 (acc.) と見るものであろう。Narten の解釈 ('erweise deine Weisheit und Fülle') は解釈の一つの可能性を示すが²¹⁾、実体詞+*kar* (mid.) が「自らの～を行使する、発揮する」を意味するのは例外的である。彼女が傍証として挙げる Ved. *kṛṇuṣvā rādhah* 'erweise deine Gunst' や、Graßmann Wb. 332 が jemandem [D. ...] etwas [A.] *erweisen, leisten, ausrichten* を設定する *akṛta prāsastim* (3sg.) 等は、いずれも「自らの中から・自らによる～をつくり出す」として理解可能である。加えて、*bū'ri-cā* を抽象名詞「豊かさ」とする点 (Baunack に基く) は説得力を欠く。この語は、Ved. *bhūri-* と同様に、普通の形容詞 (neut. nom./acc. sg. または pl. = Ved. *bhūri*) として理解すべきである。その上で文意の理解には Y 33, 11-12 が参考になる。

Y 33, 11 では信徒が典礼における献呈に際し、Mazdā と複数の神的性質 (新アヴェスタの、しばしば6人からなる神格「Aməša Spənta, 聖なる不死者」らに概ね対応) に庇護を求めた後、続く12では信徒自身がこうして得た諸性質の発揮や献呈行為によって、今度はMazdā に様々な望ましい性質を手に入れさせようとする [Narten 1982: 42f.; 1986: 186, 268f.]: Y 33, 11 *yē səuuīštō ahurō | mazdāscā ārma'tiścā | ašm̄cā frādat. gaēθəm | manascā vohū xšaθrəm̄cā | sraotā mōi mər'zdātā mōi | ādāi kahiiācīṭ pa'ti* 「最強の主であるところのMazdā と、適正な考えと、生き物を創り出す真理と、良き思考と、支配権とは、[そういう君たちは] 私に耳を傾けよ、私に寛容であれ、どんな献呈 [の品] に際しても」; Y 33, 12 *us mōi [uz]ār'suuā ahurā | ārma'ti təuuīšim dasuuā | spəništā ma'niiū mazdā | vaṅhiiā zəuuō ādā | ašā hazō əmauuat | vohū manəṅhā +fs'ratūm* 「私のために、起き上がれ、主よ。適正な考えによって強さを、君は自らに定めよ、最も神聖な意思によって、Mazdā よ、(そして) 良き献呈 [の品] によって機敏さを、真理によって攻撃性有する克服力を、良き思考によって楽しみ (?) を」。『アヴェスタ』ではMazdā もまた、人間が為す真理 (*aša-*; 正義) や正しい考え (*ārma'ti-*)、またその具体的現れである正しい行為や賞讃・供物等によって強化されたり、諸々の能力や性質を得るものとされた。中でも、後のAməša Spənta に属する *ha'ruuatāt-* 「完全性」と *amər'tāt-* 「不死性」とは (時に *aša-* や *xšaθra-* 「支配権」も)、随所にMazdā 自身も獲得すべきものとして語られる [Humbach 1957: 89, Narten 1982: 44ff.]. こ

20) Narten op. cit. 267-276 : *xraṇa'ti* については Gotō [1987: 114], Humbach et al. [1991: loc. cit.] も参照。 *fradadāθā*: Av. *dā* の完了形は全て **d'hā* 「置く」であり、**dā* 「与える」の用例は無いとされる [Kümmel 2000: 646]。しかしヴェーダ語の語法から見れば、当箇所では *prā-dhā* 「捧げる、供える」よりも *prā-dā* 「差し出す」の方が相応しく見える。

21) Hintze 2007: 285ff. も Narten に倣う ('exercise your wisdom and wealth!'). Humbach et al. [1991: II 129] ('gain knowledge -and (do it) largely- of (that) which has form with us ...') 及び Kellens & Pirart [1988: I 138; 1991: III 149] ('sois attentif et rends abondante ... la récompense digne de moi, que ...') は、いずれも *mazdā-* と中動態の意味に問題があるのみならず、文構造が余りに複雑で不自然である。

うした *Mazdā* と人間との関係は、RV に見られる神々と人間との Give-and-Take の関係に比べられる。

Y 33, 11 において、*mazdā*-が「最強の主人である」と形容されると同時に、*ārma'tišcā* 以下の4つと等位接続されていることは示唆的である。本来 *mazdā*-は、同列に並ぶ神性的諸性質のうちの筆頭格に位置する存在であった [Thieme 1970: 409, Narten op. cit.: 11ff., 33]。そこでは、*mazdā*-は抽象概念「[[正しい] 決断/知恵]」としてのみ意味をなす。このことはまた、*Mazdā* が他の諸性質と同様に（自身が体现する）「[[正しい] 決断/知恵]」を人間にもたらし、また *Mazdā* 自身もそれを必要としたことを予想させる。以上の理解に基づけば Y 40, 1 前半の文意は、Y 33, 11-12 等と同様に、献呈 [の品] (*ādā-*) に際して最高神そのものの象徴である「[[正しい] 決断/知恵]」と、*ha^aruuatāt-, amər'tāt-*等の、或いは「強さ」「機敏さ」等の諸能力・性質を、*Mazdā* 自らも手に入れるべきことを言うと考えられる。その際形容詞 *bū'ri* (sg./pl.) はそれら諸性質の多数性か、或いはその内容的豊富さや優等性を表す²²⁾、cf. RV VII 4, 6ab *īse h₁y āgnīr amṛtasya bhūrer¹ īse rāyāḥ suvīr₁yasya dātoḥ* 「Agni は出来るのだから、豊かな不死性を [与えることが]；彼は出来る (のだから)、良き勇者に富む財を与えることが」(更に次も参照：Y 31, 21 *ha^aruuatō amər'tātascā | būrōiš ā aṣaxiūacā¹ x^aāpa'θiūāt xšaθrahiūā sarō* 「(主は…) 完全性と不死性と真理と支配権との、自らの強い/優れた連合に基づいて…」)。

以上の考察は必然的に、Y 40, 1 の *mazdqm* が最高神化された *Mazdā* 本来の意味と性質とを表すとともに、神名 *mazdā*-がこれと同じ抽象名詞 (実体詞) に由来することを意味する。また詩節全体は、Y 33, 11-12 と同様に、人と神との互恵的關係を表すと理解される。

3. YH は散文体で書かれているため²³⁾、acc. sg. *mazdqm* だけからその語幹構造 (音節数) や活用の種類を特定することは出来ない。しかしこの語は、抽象名詞 (実体詞) であるという点で Ved. *medhā*-「智慧、賢さ」に完全に対応しており、両語の同語源を疑うべき理由はない [cf. Narten 1982: 63, n. 55]。Ved. *medhā*-は一貫して抽象名詞であり、常に女性-*ā*-語幹活用を示す (以下 IV を参照)。このことは、語根名詞 **m̥s-d^héh₁-*とは別に **m̥s-d^héh₁-éh₂-*が存在した可能性を示唆するが、語根抽象名詞が高い比率で女性-*ā*-語幹へ移行している事実 (上記) に鑑みれば、2種の *mazdā*-または *medhā*-を区別することは事実上意味を為さない²⁴⁾。一方アヴェスタ語内部に目を向けると、前節の議論から、抽象名詞 *mazdā*-

22) Cf. Bartholomae Wb. s. v. *būray-*: 'reichlich; völlig, vollkommen'.

23) 特に Y 40, 1 がかつて Geldner や Baunack によって例外的に韻文である (8, 8, 8, 8, 10, 8) と主張されたことと、これに対する批判については、Narten 1986: 18ff. を参照。

24) よって神名 *mazdā*-を **m̥s-d^héh₁-* (行為者名詞)、YH 40, 1 *mazdā*-及び Ved. *medhā*-を **m̥s-d^héh₁-éh₂-*と峻別する考え [Kellens & Pirart 1990: II 283, 285, Scarlata, 1999: 257, Hintze 2007: 285] は根拠を持たない。

(YH) は決して神名と無関係ではあり得ず、この最高神は前者の概念そのものの神格化であった蓋然性が高い。これは、抽象名詞 *mazdā-* 及び Ved. *medhā-* のいずれもが本来語根名詞であったことを示唆する。つまり、インド・イラン祖語における確実な出発点は語根名詞 **m̥s-d^héh₁-* であり、それは、女性-*ā-* 語幹の存在如何に関わらず、インドでは完全に女性-*ā-* 語幹として扱われ (或いはこれと合流し)、イランでは少なくとも神名の *mazdā-* は語根活用を留めた、と想定される。部分的に古い語根活用の語尾と laryngel の痕跡を持つ Av. *ādā-* 「献呈 [の品]」も同様に考えられるが、*mazdā-* と異なり、nom. sg. では既に-*ā-* 語幹に移行していることは注目される (II, 1 参照)。2 語のこの違いは、*mazdā-* が神名であるという特殊事情によって説明し得る。即ち語根女性名詞 **mazdāH-* は、ゾロアスターにより男性神の名前として新たに意味付けられるに伴い、女性-*ā-* 語幹化が阻害されたか、或いは既に-*ā-* 語幹化し (かけ) たものが、nom. sg. -s の再付加に代表される語根男性活用に換えられたものと推察される [cf. Konow 1937: 220ff., Thieme 1970: 406ff.²⁵⁾]

現在でも神名の *mazdā-* を形容詞「賢い」または行為者名詞「注意を払う、注意深い」(→I) とする考えは依然根強いが、その論拠は、語根活用を専ら行為者名詞に残すというインド・イラン共通の傾向と、女性-*ā-* 語幹の行為者名詞 (抽象名詞) Ved. *medhā-* が存在すること、そしてそれ故 Av. *zrazdā-* 「信頼している」:: Ved. *śraddhā-* 「信頼」が Av. *mazdā-* “行為者名詞”:: Ved. *medhā-* (行為者名詞) の並行現象たり得ること、の3点にほぼ尽きる²⁶⁾。しかしこれまでの議論は全て、これらの論拠がいずれも排他的な効力を持たないのみならず、むしろ神名 *Mazdā* が行為者名詞「[正しい] 決断」または「知恵」から最も自然に導き得ることを示している²⁷⁾。

25) Thieme 1970: 408f. は、語根活用を男性人格化のプロセスと見做しているようで、*ā-dā-* が残す (部分的な) 語根活用もまた、背景にある女性語幹抽象名詞の神格化の現れと見なす。

26) Humbach 1957: 83, Kuiper 1976: 29. ただし両者とも、また Thieme 1970: 407 も、「行為者名詞」と「行為者名詞」とを同じ語根名詞からの展開と捉えており、本来的な語形成の違いは考えていない (→注 24)。

27) Humbach [1957: 84ff.: 1959: II] 及び Humbach et al. [1991: II] によれば、幾つかの箇所では (殆ど場合 *mazdā-* [...] *ahura-* を示すにも関わらず) *ahura-* のみが神を指し、*mazdā-* は「語源的な意味」‘mindful of ...’ (Y 31, 2, 21, cf. 46, 16) や ‘remembering ...’ (事実上動詞的に ‘to remember, remind ...’: Y 45, 5; 47, 1; 51, 6) を持つ / 持ち得るという。しかしこれは、文解釈のための便利な手段との印象を与える。実際この「形容詞」は、ある時は動詞 **māns d^haH-* には起り得ない gen. 目的語を支配し (Y 31, 2, 21), ある時は何らかの目的語を前提とする (45, 5; 47, 1; 51, 6) など恣意的に理解されている。こうした解釈は *mazdā-* の正しい語源からは否定されるべきである。ゾロアスターが自ら歌った殆どの詩節に登場する *mazdā-* を、一貫して神名として用いているのは明らかであり、問題の箇所は全て神名としての理解を妨げない、e. g. Y 31, 2 *aṭ vā vīspāng āiōi¹ yaθā ratūm ahurō vaēdā | mazdā aiōi¹ qsaīiā¹ yā ašāt hacā juuāmahi* 「…それなら、君たち全員に私は請う、主が——その者により我々が真理に従って生きているところの *Mazdā* が——この両派 (善と悪) の審判者 (ゾロアスター) を知っているように」、47, 1 *mazdā xsāθrā¹ arma¹ti ahurō* 「*Mazdā* は支配権と共に、適正な考えと共に [ある]、主は」。

4. *mazdā*-は *mazdā*-乃至 *mazdō*-として複合語にも現れるが、全て固有名としての *Mazdā* が前提となっており、それらからこの語の原義に対する示唆は得られない：OAv. *mazdā-vara-* (Y 37, 3) 「M.にとって望ましい [Ahura 的名前たち, *āhū'riia- nāman- pl.*]', YAv. *mazda-oxta-* (Y 19, 16) 「M.によって語られた [言葉, *vacah-*]', YAv. *mazda-xšaθra-* (Y 27, 6) 「M.に属する / M.に由来する支配権を持つ²⁸⁾ [Haoma, pl.?', YAv. *mazda-ḍāta-* 「M.によって創られた」 (Y 42, 3 *ḍāta-*), YAv. *mazda-yasna-* 「M.への称讃を伴う, M.を崇める ; ゴロアスター教徒」 (固有名, 及び派生語 *māzdayasni-* も), YAv. *mazdō-fraoxta-* (Vd 19, 9) 「M.によって明言された [言葉, *vac-*]', YAv. *mazdō-frasāsta-* (Y 1, 10) 「M.によって教えられた [審判者たち, *ratu- pl.*]'。

māns daH* の他の派生語, OAv. *hu-mazdra-* 「優れて [正しく] 決断する / 賢い」及び YAv. *mazdra-* は, RV *médhira-* と同じ接尾辞 *-ra-* による形成を示すが (→ IV, 1), 後者と違い標準階を含む前接部 (man-s-*) は動詞語形からの影響を意味する [Dōyama 2013: 94]。Y 30, 1 *humazdrā* (voc.) は *Mazdā* 以外の Ahura または信徒たちを指し, YAv. *mazdra-* は *paīti. parštō. srauuaghō mazdrō haḍa. hunarō tanu. maθrō* 「天啓の言葉を尋ね聞いた, [正しく] 決断する / 賢い, 出来る男の素質を備え, 聖句が身になっている者」 (Yt 5, 91; Vd 18, 51 は全て acc.) に見られ, やはりゴロアスターまたは敬虔な信徒を指す。また Yt 13, 118 *mazdrāvaṅhu-* (< 「賢者を財として持つ」 「賢く正しい者」?) は, 真理に適う人 (*ašauuan-*) の固有名である。つまり, (-)*mazdra-* は全て *Mazdā* に従う者を指す。この語が元の動詞の意味を留めているどうかは決められないが, ゴロアスター教徒が *Mazdā* への信仰に基づき常に善か悪かの決断を迫られる存在であることを考えるならば (e. g. Y 30, 4-6), この語がそういう者を指して 「[正しく] 決断する者」を意味すると考えることは, 根拠無しとは言えない。YAv. の定型表現において, 他の 3 つの形容詞が極めて具体的な特徴を描いていることも, これが単なる 「賢い」 ではない可能性を暗示する。

YAv. *mazdātaiiāe-ca* (Vr 15, 2) は **māns daH* から接尾辞 *-ti-* によって作られた抽象名詞であるが, 事実上 dat. inf. として機能している, cf. Sgall 1958: 176ff. 意味的にも中動態の用法が想定され, 恐らく同じ意味の dat. inf. OAv. *mān-/mən-da'diāi* (→ I) に倣った用法かと考えられる : Vr 15, 2 *sraošasca idā astū ahurahe mazdā yasnāi ... yasnaheca haptanḥātōiš frauūkaēca pa'tiāstaiiāe-ca mazdātaiiāe-ca z'razdātaiiāe-ca framər'taiiāe-ca fraoxtaiiāe-ca vər'θrayne ašaone ...* 「従順さが, ここにあれ… Ahura *Mazdā* を称讃する為, そして勝利し真理に適う *Yasna Haptanḥāiti* を, 明言する為, [それを] 繰り返す為, [それに] 思いを向ける為, 信を置く為, [それを] 暗唱する為, 明言する為に…」。

mazdāθa- については I を参照のこと²⁹⁾。

28) Cf. Y 32, 1, Y 47, 1 (前注), Y 51, 6 (→ III)。

29) Yt 13, 73 *mazdayas-ciṭ* は理解困難 (cf. Bartholomae Wb. 1327: **maziiscit*)

III *mazdā-*と *ahura-*の語順

神名を構成する *mazdā-*と *ahura-*の2語が文中でどのように配置されるかは、テキスト層に応じて明瞭な傾向がある。Gāθā では *mazdā-(...)ahura-* (2語は離れ得る) が標準であり、YAv. では *ahura- mazdā-* (2語は離れない) がほぼ絶対である [Bartholomae Wb. 286ff.]³⁰⁾。Gāθā における語順をより細かく分類した Kellens [1984: 133-136] の集計・考察を、幾つかの補足とともに整理し直すと、次の5点が指摘出来る³¹⁾：

- ① 神名としていずれかの語のみが用いられる場合は、殆ど全て (3例以外) *mazdā-* が用いられる (68x)。
- ② 2語が同一行に現れる場合で、両方ともが^s, caesura (中間休止) で隔てられた下部単位の内部に収まる時は³²⁾, *mazdā- ahura-* (30x) または他の1語が介在する *mazdā- ... ahura-* (19x) が標準である。この位置では *ahura- mazdā-* は存在せず, *ahura- ... mazdā-* が3例のみ回収される。
- ③ 2語が同一行にはあるが caesura を跨いで現れる場合, *mazdā- (...) # (...) ahura-* (7x; *mazdā- # ahura-*無し) か, *ahura- # (...) mazdā-* (11x; うち *ahura- # mazdā-* 5x) のいずれかである。
- ④ 2語が同一行に現れない場合はいずれの語順も見られるが, *ahura- | mazdā-* が比較的多い: *mazdā- | ahura-* (18x) :: *ahura- | mazdā-* (32x)。
- ⑤ YH では, 連続する *mazdā- ahura-* (15x) も *ahura- mazdā-* (9x) も見られる。

本論にとって重要な点は、Gāθā では神の固有名はあくまで *mazdā-* であり, *ahura-* は必ずしも不可欠の要素ではないこと (①), そして神名が *mazdā-* と *ahura-* の2語の連続からなる場合、休止の無い (つまり通常の連続する) 発語の中では常に *mazdā- ahura-* の語順しか起こり得ない (②) ことである。これらのことが示唆するのは, *mazdā- ahura-* はインド・イランに共通して見られる〈固有名+称号〉という規範的な語順を示し, 「主[なる]Mazdā」を意味するということである, e.g. Ved. *sōma- rājan-* 「王[なる]ソーマ」, *vāsiṣṭha- ṛṣi-* 「聖仙[なる]ヴァスィシュタ」, OPers. *dārayavau- xšāyaθiya-* 「王[なる]ダーラヤワウ」 [Delbrück 1878: 42; 1888: 19, Gotō 2000: 153f., n. 22]。この語順は本来、固有名に言及した後で、その肩書きを同格的に追記したことに由来すると思われる。*mazdā-* の後ろでは, *ahura-* が様々な距離を伴って離れ得ることがこれを暗示する³³⁾。これに対して、YAv. の

30) 例外的に YAv. に見られる *mazdā ahurahe* (いずれも gen.) は Gāθā 及び YH の対応表現の再利用か、模倣的に作られた可能性が高い [Bartholomae Wb. 286, Narten 1982: 81, n. 11]。

31) *mazdā- ahura-* を中心に、格形や細かな韻律上の位置についての統計は Kuiper 1976: 41 も参照。

32) Gāθā では、韻律上の1行 (Ved. pāda) は通常 caesura によって隔てられた2ないし3の下部単位からなり (e.g. 4+7, 7+7, 7+9, 7+7+5), 更に数行がまとまって1詩節を構成する。

33) Kuiper [1976: 40, 41f.] は, *mazdā-* が *ahura-* にかかる形容詞「賢い」であることの論拠の一つとして, Delbrück [1878: 35-39; 1888: 19f.] に基づき, Veda 散文では形容詞が実体詞の前に

ahura- mazdā-は同格的表現ではなく、全体として一つ概念を表しており、ちょうど〈形容詞+実体詞〉に見るような密接な関係に比べられる³⁴⁾。

OAv. *mazdā- ahura-*がどのような経緯で後の YAv. *ahura- mazdā-* (OP では更に一語化：*auramazdā-*) へと推移したのかは必ずしも明らかでないが、上掲②～⑤の分布からは、既に Gaθā でも環境によっては語順の逆転が起き得たこと、ただしそれは、2語の間に韻律上または時間的な隔たりがある時に限られることが分かる。②に例外的な3例の *ahura- ... mazdā-*のうち2例は、代名詞による Mazdā への言及に後続していることから、通常とは逆順で神の名を次第に特定化する修辭的表現 (指示代名詞 → 称号 → 固有名)、つまり倒置の可能性がある：Y 51, 6 *yā vahiiō vaṅhēuš dazdē¹ yascā hōi vārāi rādāt | ahurō xšaθrā mazdā²* 「良いものよりも良いものを自らに置き定める者、そして彼の意向に合う者がいれば、[その者には] 主が支配権とともにある、(即ち) Mazdā が³」(cf. Y 47, 1 → 注 27)³⁵⁾。 *mazdā-* (...) *ahura-* に比べて *ahura- ... mazdā-* の2語の間に横たわる明らかな韻律的・時間的距離は、後者の語順が本質的に密接な繋がりを持たず、言い換えや倒置等の二次的な要因によるものであったことを強く示唆する。その中で *ahura-* 単独の3例 (①) の存在は、Mazdā の補足的 (倒置的) 配置が無くとも、sg. *ahura-* = Mazdā とする理解が、既に Gaθā で少しずつ可能になりつつあったことを窺わせる。

一方 YH では、*mazdā- ahura-* と並び *ahura- mazdā-* がしばしば現れることが目を引く (⑤)。一見 YAv. への発展の途上にあるように見えるが、一般に YH と Gaθā とは同じ方言を示すため安易な結論は控えるべきであろう [Narten 1986: 108, n. 88]。また YH が本来的に韻文でないとしても、それは典礼における祝詞であり、必ずしも自然な発語における語順を反映しているとは言い切れない。YH における2語の語順・語法については、例えば Kellens [1984: 135f.] は、3例を除く全用例において *ahura- mazdā-* が複文の従属節に、*mazdā- ahura-* が帰結節に現れるとし³⁶⁾、また Narten [1986: loc. cit.] は、用例の3分

置かれるのが通常の語順であることを指摘する。しかしこれは形容詞が実体詞の直前に来ることが前提であり、よって *mazdā- ... ahura-* が説明出来ない。また彼は〈固有名+称号〉の可能性に一切触れていない。

34) Delbrück 1888: 19, Gotō 2000: 153f, n. 22 を参照。この種の表現に、例えば *rājan- vāruṇa-* 「ヴァルナ王」、*devā- sāvitar-* 「サヴィタル神」、*pitār- prajāpati-* 「ブラジャーパティ親父」(=: *dyāv- pitār-* 「父なる天」) など。

35) 同様に Y 32, 1 *axiiā ... ahiiā ... ahiiā ... ahurahiiā¹ rruuāzomā mazdā²* 「この者の…彼の…彼の… (即ち) 主の喜びを、(即ち) Mazdā の [を]」；Y 33, 2 には代名詞が了解される：... *tōi vārāi rādənti¹ ahurahiiā zaosē mazdā²* 「…彼らは [彼の] 意図に合う、主の満足の中で、Mazdā の [満足の中で] (或いは「…適う。[彼らは] 主の満足の中にある、Mazdā の [満足の中に])」。

36) Delbrück 1878: 37 は、ヴェーダ語散文で複数の形容詞が実体詞に後置される場合について、それが従属節の中では前置される例を提示する：SB I 6, 33, 1 *tvāštur ha vai putrāḥ trīśrīṣā ṣaḍakṣā āsa* 「Tvāštār には、三つ頭の六つ目の息子がいたのだ」に対して、I 2, 3, 2 *sā yātra trīśrīṣānam tvāstrām viśvārūpaṃ jaghāna, ...* 「彼 (Indra) が、三つ頭の、Tvāštār の子である Viśvarūpa を殺した時…」。

の2が voc.で現れるという事実を指摘している。今後、韻律、文法、文体、語用論の諸点から、一方で韻文の Gāthā と、また他方でヴェーダ語散文と慎重に比較してゆく必要があるう。

Gāthā に韻律上の制限があるとしても [cf. Kellens 1984: 134ff.], 上記①②に見られる語順の分布と傾向とは、*mazdā- ahura-*の語順の本来性と、〈固有名+称号〉「主[なる] Mazda」としての分析を支持する。そこで *mazdā-*の本来の意味に遡るならば、この固有名が行為者名詞・形容詞であって「主[なる] 決断する者/賢い者」という平板な呼ばれ方をしたとは考え難い。ゾロアスターの宗教改革がもたらしたインパクトを考慮しても、最高神の名は「[正しい] 決断/賢さ」そのものの神格化として遥かに良く説明し得るであろう。

IV Ved. *medhā-*及び関連語彙

1. Ved. *medhā-* (RV+) は「智慧、賢さ」を意味し、一貫して女性-ā-語幹の活用を示す：(RV で) nom. sg. *medhā*, acc. sg. *medhām*, voc. sg. *medhe* (AV), instr. sg. *medhāyā*, nom./acc. pl. *medhās*, instr. pl. *medhābhis*。**m̥s-d^héh₁*-もしくは **m̥s-d^hh₁-éh₂*-に遡るが³⁷⁾。単独で用いられる以外に、複合語 *medhā-karā-*「智慧を作る [Agni]」(X 91, 8), *su-medhā-*「優れた智慧」(実体詞：VIII 5, 6) にも見られる。形容詞 *su-medhā-*「優れて賢い」(nom. sg. **dhās*, acc. sg. **dhām*, etc.) は、Bahuvrihi「良き智慧を持つ」か、語根複合語(行為者名詞)「良く決断する>智慧ある、賢い」、或いはそれらの混交と思われる [Scarlata 1999: 258]。少なくとも2例に設定される *su-medhās-* (X 62, 1-4 voc. pl. *sumedhasaḥ* [Aṅgiras], X 65, 10 acc. sg. *sumedhāsam* [Aṅgiras/Bṛhaspati?]) は、nom. sg. *su-medhās* からの類推による二次語形³⁸⁾。

既に RV で「供犠；供物」を意味する *médha-*は(恐らく RV X 132, 7 *su-médha-*「良き供犠を為す」/固有名も)、*m̥s-d^hH-o-*に遡るか、または二次的に「語根」と考えられた *medh* (常に標準階) からの形成と思われるが³⁹⁾、その意味的発展の経緯は不明である。一方で *médha-*を含む複合語・派生語の中には、意味的に *medhā-*が想定される場合が少なくない (cf. Av. *mazdā^o ~ mazda^o* → II, 4)。中でも RV *medhā-sāti-*「智慧の獲得」は全て(以下2参照)、また恐らく RV *medhā-pati-*「智慧の主」(I 43, 4 *gāthāpatim medhāpatim rudrām*)

37) Yaska III 19 ad Nigh. 15 は *medhā-*を *matau dhiyate* と説明するが、「考えの中に置く」の意味は必ずしも明確でない(「考慮に入れる」「記憶に留まる」「熟慮する」?) [Dōyama in Press 1: Chapter 3.1]。

38) 伝統的には、Pp.同様、nom. sg. *sumedhās* にも語幹 *sumedhās-*が設定されてきた。

39) *vi-dhā* → *vidh* に並行現象が見られる [Hoffmann 1969: 4f.]。Pāṇini III 3, 104 及び Gaṇapātha 171, 8 は、*medhā-*にも語根 *medh* からの派生を想定している。

でも、前分は *medhā*- と同義で用いられている⁴⁰⁾。 *mitā-medha*- 「*m.*の確立した」(VIII 53, 5 *mitāmedhābhir ūtibhir*), 及び *medha-yū*- 「*m.*を求める」(IV 38, 3 *medhayūṃ nā śūram*) にも同様の可能性がある⁴¹⁾。

RV *médhira*- 「賢い」は、直接 **m̥s-d^haH* からの派生 (<**m̥s-d^hH-[i]ra*-) も可能だが、アクセントからは恐らく二次的な「語根」*medh* (上記参照) を基に作られたと思われる [Dōyama 2013: 94f.]。 *médhya*- 「賢い [見者]」(V 1, 12) も同様⁴²⁾。 *mandhātār*- 「[正しく] 決断する者；賢者」は **māns d^haH* から直接作られた行為者名詞であり、Nigh. III 15 (≈ AVPar ILVIII 85) は *medhāvin*- 「智慧を備えた」の同義語として規定している [Dōyama in Press 1: Chapter 3.1]。

2. *medhā*- の用法の大きな特徴の一つは、それが詩人・祭官から神々への望みとして、しばしば *sanī*- 「勝利・獲得」と並んで言及されることである⁴³⁾ : I 18, 6 *sādasas pātīm ... sanīm medhām ayāsiṣam* 「居所の主⁴⁴⁾、勝利を、智慧を、私は [今] 請うた」、II 34, 7 *tām no dāta maruto vājinaṃ rātha¹ āpānām brāhma citāyad divé-dive | iṣaṃ stotṛbhyo vjāneṣu kārāve¹ sanīm medhām āriṣṭaṃ duṣṭāraṃ sāhaḥ* 「我々に、君たちは与えよ、Marut たちよ、戦車に [繋いだ] その勝ち馬を、[目的に] 到達し得る、日々現れ出る brahmaṇ (言葉の実現力) を；諸集落において、称讃者たちに栄養を、詩人に勝利を、智慧を、傷付けられ得ない、乗り越えられ得ない征服力を」、V 27, 4cd *dādād ṛcā sanīm yaté¹ dādan medhām ṛtāyaté* 「彼は与えるべし、讃歌を伴って進む者 (詩人) に、勝利を。彼は与えるべし、天理を求める者に、智慧を」、IX 32, 6 *asmé dhehi dyumād yāso¹ maghāvadbhyaś ca māhyaṃ ca | sanīm medhām utá śrávaḥ* 「我々に —— 有力者たちと私とに ——、輝かしい栄光を、君 (Soma) は置き定めよ；勝利を、智慧を、そして名声を」。 *sanī*- 「勝利」の意味は、戦い・戦車競走・掠奪等における成功である。これは、しばしば言及される詩人や族長による智慧の獲得 (*medhām sanī*, *medhā-sāti*-) が⁴⁵⁾、戦利品や財産、また具体的に牛・馬 (・太陽光) の獲得と共に述

40) Oldenberg Kl. Schr. II 1160ff. 複合語前分末母音の短音化は先行する *gāthā*->*gātha*-^o にも見られる, cf. Wackernagel/Debrunner AiG II-1 134 (+ Nachtr. 41)。MS, TB *médha-pati*- は恐らく *médha*- 「供犠」としての二次解釈に基づく, cf. op. cit. II-1 42, 264 (+ Nachtr. 76)。

41) RV の固有名 *médhātīthi*- は *medhā*- または *médha*- 「供犠」を含む。同じく固有名の *ny-medhā*- (RV+), *priyā-medha*- (RV+) については、参考文献も含め Mayrhofer 2003: 51, 63; EWAia II 378 参照。

42) RV の固有名 *médhyātīthi*- は恐らくこの語を持つ [Mayrhofer 2003: 73 に参考文献]。固有名 *médhya*- (RV VIII 52, 2) は前者の短縮形と考えられる [Geldner RV II 374, Mayrhofer loc. cit.]。 *médhya*- 「供犠に相応しい」(AV+) は *médha*- (RV+) からの (または ŚB+ *médhas*- 「供犠」からの?) 派生。

43) 以下と同様に Ved. *medhā*- の含意を文脈から検討したものに Oldenberg loc. cit. (→ 注 40), Konow 1937: 217ff. がある。

44) Sūkta 前半 (～第 5 詩節) は Brahmanas Pati への讃歌。

45) 例えば IV 37, 6, VII 66, 8, VII 94, 6, VIII 3, 18, VIII 69, 1。

べられることから窺える：IX 9, 9 *pávamāna máhi śrávo* | *gám ásvam rāsi vīravat* | *sānā medhām sánā s.vāḥ* 「清まりつつある [Soma] よ、大きな名声を、牛を、馬を、勇者からなる [財産] を、君は贈り与えよ。智慧を、君は (我々に) 勝ち取れ。太陽光を、君は勝ち取れ」；VIII 71, 5 *yám tvám vipra medhāsātāv* | *agne hinōṣi dhānāya* | *sá távotí gōṣu gántā* 「君が、[靈感に] 震える者よ、智慧の獲得において、Agni よ、賭物/財産のために駆り立てるところの、その彼 (族長) は、君の助けによって、牛たちのもとに行く者である」、X 147, 3cd *ārcanti toké tánaye páriṣṭiṣu* | *medhāsātā vājinam āhraye dhāne* 「彼ら (部族長たち) は讃える、諸々の窮状の中で、続きゆく子孫を巡って、智慧の獲得を巡って、恥じることない賭物/財産を巡って、決勝力を持つ者 (詩人/Indra) を」⁴⁶⁾。

sanī- (或いは戦利品等の獲得) と *medhā-* (の獲得) との関係は必ずしも明らかではない。しかし両語は同質的・並行的な概念とは考え難く、また常に接続詞を介さず並置されるという性格からは、2つの異質な概念が同格的に置かれている可能性がある。これに関して、詩人と *medhā-* との関わり方は一つのヒントになろう。詩人がしばしば獲得した *medhā-* を用いて神々を祭場に連れてきたり (I 165, 14)、献供を遂行したり (VII 104, 6)、ソーマを搾ったり (IX 26, 3, IX 65, 16) する場合、*medhā-* は事実上、智慧を働かせた結果である言葉や讃歌を指すか、或いはそれを含意する⁴⁷⁾、VIII 52, 9cd *pūrvīr ṛtāsya bṛhatīr anūṣata* | *stotūr medhā asṛkṣata* 「天理に属する多くの背の高い [讃歌] たちが、今声を挙げた。歌い手の智慧/詩たちが、[今] 流れ出た」、V 42, 13 *prā sū mahé suśaraṇāya medhām* | *gīram bhare nāvyaśim jāyamānām* 「偉大な、よき庇護もたらす [Tvāṣṭar] に、しかと、私は自らの智慧/詩を、歓迎歌を捧げる、より新しい (今) 生まれつつある [歓迎歌] を」 [Konow 1937: 217f. も参照]。このことから、詩人や部族長はまず神々から *medhā-* を獲得し、次によって祭式儀礼を行ない、その結果戦い・戦車競走・掠奪等における勝利に達する、という構図を想定し得る [cf. Oldenberg Kl. Schr. II 1161]。上記 VIII 71, 5 では智慧の獲得が牛の獲得に繋がり、AVŚ VI 108, 1 (→ IV, 4) では *medhā-* が馬・牛を連れてくるとされることも、この仮説を支持する。つまり、智慧の獲得そのものが勝利・獲得を意味していることになる。RV において智慧の獲得の成功が強調されるのは、それが最終的に祭式の成功=願望の成就を決するものであったからと言えよう、cf. IV 37, 6cd *sá ... astu sānitā medhāsātā ...* 「彼 (Ṛbhu たちと Indra とが助ける者) こそは…勝利者たれ、智慧の獲得において…」、VII 94, 6 *tā vām ... havāmahe* | *medhāsātā sanīṣyāvah* 「そういう君たち両者 (Indra と Agni) を…我々は呼んでいる、智慧の獲得において勝利したいと思って」。

46) 他に I 129, 1, VIII 40, 2。また次の定形表現も参照：*sahasrasām* (VIII 103, 3) / *sahasrasā* (X 64,

6) *medhāsātāv iva tmānā* 「智慧の獲得におけるように (智慧を獲得する時のように)、手ずから千頭を勝ち取る [Agni を：VIII 103, 3] / [競走馬たちが：X 64, 6]。

47) 並行現象が、*man* の多くの派生名詞 (*matī-*, *mānman-*, *māntra-*) に見られる。

3. 上に見た用例では, *medhā*-は詩人(・部族長)が神々から獲得するものとされている⁴⁸⁾。それを得た詩人は *su-medhā*-となり, 神々を招請したり讃歌を歌ったりする (I 185, 10, III 38, 1, VI 67, 8, X 125, 5, cf. VIII 48, 1)。*su-medhā*-「優れた智慧持つ者」であることは, ちょうど *medhā*-が言葉や讃歌を含意していることに対応して, 「良き言葉の使い手」であることと同義である⁴⁹⁾。しかし一方で, *medhā*-は人間だけのものではなく, 神々もまた所有し發揮するものとされる: IV 33, 10 *yé hāri medhāy, okthā mādanta`indrāya cakriḥ suyūjā yé ásvā* 「智慧によって, 諸々の讃辞に酔いつつ, 二頭の Hari たちを, (即ち) 繋ぎやすい二頭の馬たちを, Indra のために作ったところの [Ṛbhu たちは…]」。実際 *su-medhā*-と呼ばれるのは, 人間よりもむしろ, Agni や Soma 等の神々またはその属性であることが多い (8x), e. g. II 3, 1cd *hótā pāvakāḥ pradivāḥ sumedhā`devó devān yajat, v agnir ārhan* 「昔から居る清らかな Hotar, 優れた智慧持つ神として, Agni は神々を祭れ, 相応しい者として」, III 57, 5ab *yā te jihvā mādhumatī sumedhā* 「君 (Agni) にある, 蜜に富む, 優れた智慧持つ舌」; IX 92, 3ab *prā sumedhā gātuvīd viśvādevaḥ`sómah punānāḥ sáda eti nityam* 「優れた智慧持つ, 道を見出す, 一切の神々に属する Soma は, 清まりつつ固有の座席へと前進する」⁵⁰⁾。詩人の能力の顕れとしての *medhā*-の位置付けを考えると, 神々の祭官である Agni がしばしば *sumedhā*-と呼ばれることは当然であろう。同様に Agni は *medhā-karā* とも呼ばれる (→ IV, 1)。

medhā-を巡るこれまでの議論は, **māns d^haH* の他の派生語にも当てはまる。RV *médhira*-は人間の詩人を指す他, 神々, 中でも殆どが Agni に対して用いられる⁵¹⁾。*médhya*-も Agni を, *sumedhas* は Aṅgiras または Bṛhaspati を (→ IV, 1), そして *mandhātār*-は詩人・祭官の固有名/一般名, 及び祭官としての Agni を指す [堂山 2011: 293f. (266f.)]。つまり, **māns d^haH* 「[正しい] 決断・判断を為す」という行為は, 概して人間または神的存在の詩人・祭官, 中でも Agni について用いられることが圧倒的に多いことが分かる。

4. Atharvaveda (Śaunaka 派: AVŚ) VI 108 には, *medhā*-そのものに向けられた讃歌が残っている。部分的にテキストと韻律に乱れが見えるが, 上記 2 及び 3 で見た RV に見られる *medhā*-の諸性質をよく表すため, 以下簡単な解説とともにテキスト・訳を挙げる

48) 次の例は唯一, 詩人が *medhā*-を父親 (或いは: =神々?) から受け継いだか奪ったかしたものとす: VIII 6, 10 *ahām id dhī pītūḥ pári`medhām ṛtāsya jagrābha | ahām sūrya ivājani* 「私 (詩人 Vatsa) こそが, 父から, 天理に属する決断力を, 掴み取ったのだから。私は, 太陽のように [今] 生まれた」。

49) Cf. X 125, 5cd (Vāc [言葉の神格] の言葉) *yām kāmāye tām-tam ugrām kṛṇomi`tām brahmāṇam tām ṛṣim tām sumedhām* 「私が望む者は誰でも, 彼を武力ある者に, 私は為す, 彼を祭官に, 彼を聖仙に, 彼を優れた智慧持つ者に」。

50) 他に III 15, 5, X 45, 7 (Agni), IX 93, 3, IX 97, 23 (Soma), X 47, 6 (Bṛhaspati); VII 91, 3 (?).

51) 人間の詩人 I 11, 7, VII 87, 4, VIII 38, 9; 43, 19 (*maniṣino médhiraśo vipāścītaḥ*), X 89, 10; Agni: I 31, 2; 105, 14 (*devó... médhīro*); 127, 7 (2x), III 1, 3; 21, 4, VIII 29, 2, X 100, 6 (*jaritā médhiraḥ kavīḥ*); その他の神々では Indra I 61, 4, VI 42, 3; Varuṇa I 25, 20; Soma IX 68, 4。

(Paippalāda 派では 3 詩節が部分的に対応するのみ；AVŚ と異なる部分はローマン体で示す)。Av. *mazdā-* のように *medhā-* が擬人化されて呼びかけられるという点も目を引く⁵²⁾。Kausikasūtra X 20 によれば本讃歌は、Medhājanana (新生児のための諸儀礼 [Jātakarmaṇ]) の一つで、子に智慧を作り出すための儀式) において、また LVII 28 によればヴェーダ学生の入門式 (Upanayana) において用いられるという⁵³⁾：

- (1) *t_vvām no medhe prathamā¹ góbhīr āśvebhīr ā gahī |*
t_vvām sūryasya raśmībhis¹ t_vvām no asi yajñīyā ||

「君は、智慧よ、最初に我々の所へ、牛たちと共に、馬たちと共に、やって来い、君は、太陽の光線たちと共に。君は、我々にとって、祭るに相応しいものだ」(～AVP XIX 17, 7 cd *t_vvām sūryasya raśmiṣu¹ tvam no vasudā yajñīyā* 「君は、太陽の光線たちのもとで／の中で…。君は、我々に、品々を与えるもの、祭るに相応しいものだ」)

IX 9, 9 で智慧が牛・馬・太陽光と共に求められ、また VIII 71, 5 では牛の獲得が智慧の獲得に基づくことに一致する (→ IV, 2)。*raśmībhis* は、*góbhīr, āśvebhīr* (cf. AVP *vasudā*) との並行性と上記箇所との対応により、「～を伴って、連れて」の意味に解される⁵⁴⁾。太陽光の獲得は、RV の詩人がしばしば光や明さを求めることに通じるが、特に *medhā-* と牛・馬・太陽光の獲得との関係については更なる検討を要する (以下第 5 詩節も参照)。

- (2) *medhām ahām prathamām brāhmaṇvatīm brāhmajūtām ṛṣiṣṭutām | (metre?)*
prāpitām brahmacāribhīr¹ devānām āvase huve ||

「智慧を、私は、brahmaṇ (言葉の実現力) を備えた最初のものとして、brahmaṇ に急ぎ立てられたものとして、聖仙らによって称えられたものとして、ヴェーダ学生らによって飲まれたものとして、神々の助力のために、[ここに] 呼ぶ」(～AVP XIX 17, 8ab: *brāhmajūtām* 無し；cd: *praṇitām brahmacāribhīr¹ devānām avase vṛṇe* 「智慧を…として、ヴェーダ学生らによって導かれたものとして… [ここに] 選ぶ」)

medhā- が「brahmaṇ を備えたもの」であるのは、それが事実上詩人の言葉・讃歌を含意することに一致し、「brahmaṇ に急ぎ立てられたもの」であるとは、それ自体が言葉・讃歌の力によって促される・獲得されることを言うと考えられる (cf. 以下第 5 詩節)。

- (3) *yām medhām ṛbhāvo vidūr¹ yām medhām āsurā vidūḥ |*
ṛṣayo bhadrām medhām yām vidús tām¹ máyṣy ā veśayāmasi ||

「Ṛbhu たちが知るところの智慧、Asura たちが知るところの智慧、聖仙たちが幸あるものとして知るところの智慧、それを、私の中に、我々は入り込ませる」

神々も聖仙たちも *medhā-* を知っている (持っている) ことは、IV, 3 に見た RV の記述と

52) 動詞 **māns d^hā* の能動態が見え始めるのも AV であることを含め、今後 Av. と AV との関係について吟味する必要がある。

53) Cf. Whitney/Lanman 1905: 108f., Kajihara 1995: 1052 (1).

54) Kajihara 1995: 1049 (4), n. 3 は異なる解釈。

同じである。特に IV 33, 10 でも、*medhā*-によって馬たちを作ったとされる *Ṛbhu* たちと (cf. IV 37, 6 → IV, 2) *Asura* たちとが並んで言及されていることは刮目に値する。前者は技能・技術に長けた神々であり、また *Asura* たちは *māyā*-と呼ばれる「計算能力：幻力、魔力」の持ち主であるが、アーリヤ人たちはそうした高度なものづくりや技術力を、アーリヤ社会には属さない、異部族の文化だと考えていた [後藤 2014: 52]⁵⁵⁾。これらの神々と *medhā*-とのつながりは、この概念が伝統的なアーリヤ文化とは異質の神々・部族に属するものとしての側面を持っていたことを窺わせる。元々肉切り職人とされる *Tvaṣtar* 神もアーリヤ社会外の専門職人と看做されるが [後藤 同上], V 42, 13 (→ IV, 2) で詩人がこの神に *medhā*-を捧げていることも、同様に解釈される。

(4) *yām ṛṣayo bhūtakṛto | medhām medhāvīno vidūh |*
tāyā mām adyā medhāyā- | agne medhāvinam kṛnu ||

「[諸] 存在をつくり出す、智慧を備えた聖仙たちが知るところの智慧、その智慧によって、今日、私を、Agni よ、智慧あるものと為せ」

RV の用例が示すのと同様に (→ IV, 3) *Agni* が *medhā*-を持つものとされ、それを持つ *Agni* が人間を *medhā*-のある状態にすべきことが言われる。なお *medhāvin-*「智慧を持つ」の語は RV には見られず、AV のこの箇所が初出である。

(5) *medhām sāyām medhām prātār | medhām madhyāndinam pāri |*
medhām sūryasya raśmībhir | vācasā veśayāmahe ||

「智慧を、朝に、智慧を、夕に、智慧を、昼頃に、智慧を、太陽の光線たちと共に、言葉と共に、我々は自らの中に入り込ませる」(～AVP XIX 17, 9cd *medhām sūryenodyato dirāṇā ut tuṣṭuma* ??)

第1詩節と同じく智慧を太陽光と共に、また第2詩節と同じく言葉と共に獲得すべきことが述べられる。当箇所を言葉通り取れば、太陽光は牛・馬と違い、智慧とともに体の中に取り込まれるものということになる。太陽光と生命機能との関係を想起させる。*vācasā* は「言葉によって」も可能 (cf. 上記第3詩節)。

V Ved. *medhā*-と Av. *mazdā*-

I. ヴェーダの詩人が祭式で *medhā*-を神々から望む一方、神々もまたそれを保有・発揮する存在であることは、II, 2 で見た Y 40, 1 の解釈を補強する。そこでの「決断／知恵を自らに作り出す」*Mazdā Ahura* は、文字通り AVŚ VI 108, 3 「智慧を知る *Asura*」に対応する。その *Asura* (及び並置される *Ṛbhu* たち) が、インド・アーリヤ社会において他部族的で異

55) 印欧語族のこうした技術や蓄財に対する軽視については、ゲルマン語派を例にした後藤 [2004: 49f.; 2008: 153f.] の指摘を参照。

質な神格と捉えられていたという事実は、反アーリヤ的思想を持ったゾロアスターが *mazdā-*を最高神に据えたことを逆照射している。

2. Ved. *medhā-*及び関連語の検討から、インドの火神 Agni が頻繁に *medhā-*を持つ、または **māns d^haH* の行為に深く関わることを見た。Agni の別称である *medhā-karā-* 「(他人に) 智慧を作る者」(X 91, 8) は、Y 40, 1 *mazdqm ... kər^sšuuā* 「決断／知恵を…自らに作れ」に対応する。この両者は、前者が恐らく能動態を前提とするという点で異なるが (cf. AVŚ VI 108, 4 → IV, 4), *medhā-*が人間にも神々にも等しく属し得ることを考えると、この両側面が2つの表現に現れていると言える。*medhā-*と Agni との密接な関わりは、Mazdā と Agni との関係を精査する必要性を提起する。ただし *agnī-*のイラン側の対応語は事実上例証されていない。通常「火」を表すのは Av. *atar-*であるが、これがゾロアスター教の聖火として信徒の儀礼において重要な意味を持つことは改めて強調する必要もなからう。Narten [1986: 156] はこの *atar-*が、Y 36, 3 (YH) で *atar- mazdā ahurahiiā* 「主 Mazdā の火」と呼びかけられ、儀礼の場において Mazdā そのものの顕れとして捉えられていること (Transsubstantiation 「全質変化」) を示したが、更に Gotō [2000: 150f.+n. 12] は、同様の観念が RV の *agnī-*や太陽と Varuṇa (及び他の神々) との間にも存在することを明らかにした。このことは、従来言われている Mazdā と Varuṇa の対応を再確認させるとともに、ヴェーダの Agni の性質を Mazdā の機能と関係付けられないかどうか、積極的に検討すべきことを提案している。

しかし一方で、間違いなくインド・イラン共通時代に遡る **agnī-*をゾロアスターが放棄したことに注視すべきであろう。Av. *atar-*は元々、生き物としての火である *agnī-*と違い物質として火を表す中性名詞であったろうが、二次的に男性活用に変えられたと考えられる (Av. *atarš* nom. sg., OAv. *ātrēm*, YAv. *ātrēm* acc. sg. < **ātrēm*) [cf. Hoffman/Forssman 2004: 91, 152]。これは「火」の擬人化・神格化によるものとしてのみ説明可能で、語根女性名詞 *mazdā-*が神格化されるに伴い男性名詞化した過程と軌を一にする現象である。古アヴェスタでは「火」が独立した神格として活動しないことを考慮するならば、Mazdā の本来的性質の解明には、インドの Varuṇa との比較だけでなく、*medhā-*とこれに深く関わる Agni の機能との比較がもう一つの大きな柱になることを、以上の考察は物語る。

3. ヴェーダ語の用例から浮かび上がる *medhā-*のもう一つの特徴は、詩人の効力ある言葉・讃歌に具現化する智慧の獲得が、勝利、即ち戦利品・掠奪品・戦車競走の賭物等の獲得に等しい、或いはそれらをもたらすと考えられていたことである。具体的な品目には牛・馬・太陽光が目立つ (RV IX 9, 9 → IV, 2; AVŚ VI 108, 1 → IV, 4)。これは一見、ゾロアスターの言葉にも対応するよう見える、e. g. Y 44, 18 *taṭ θβā pər^sā¹ ər^sš mōi vaocā ahurā | kaθā ašā¹ | taṭ mīzdəm hanānī | dasā aspā¹ |⁺ arš, nuua¹tiš uštrəm^{cā}* 「それを君に、私は尋ねる。率直に私

に語れ、主よ。どうすれば、真理によって、その報酬を、私は手に入れることになるのか (*hanāni* 1sg. subj. ≈ Ved. *sānā* RV V 75, 2), (即ち) 十の雌馬たちを種馬とともに、そして駱駝を」。しかしながら、ヴェーダの言葉は常に「牛探し (*gāv-iṣṭi-*)」、即ち他部族への襲撃による牛の掠奪を想定しているのに対して [後藤 2004: 47f.; 2008: 143], ゴロアスターはこうした行為を蛮行として非難している [堂山 2005: 249]。つまり彼の目指した社会は牧畜・農耕中心の安定的定住生活を背景としており、アヴェスタにおける牛馬獲得の意味は自ずとインドの場合とは異なる。

ゴロアスターの農牧偏重の姿勢は随所に見られる、e. g. Y 31, 15 *pər'sā auuat yā +maēniš¹ yā draguauāitē xšaθrəm hunāti | duš.šīiaθ'nāi ahurā¹ yā nōiṭ jiiōtūm hanar^o vīnasti | vāstriehiia aēnaghō¹ pasəuš virāatcā adrujiiantō* 「かのことを、私は尋ねる；どんな報復があるのか、虚偽に満ちた悪行者の為に支配権を促す者がいるとしたら、主よ、(また) 家畜と、嘘をつかない農牧民の [中の立派な] 男⁵⁶⁾とに対する罪過以外に、生きるすべを見出さない者がいるとしたら」。vāstriia- 「農牧民」は、文字通りは「牧草・牧畜に属する者」であるが、既に古アヴェスタの時代には農耕を中心にする農牧民を意味していた [堂山 2005: 238f.]。これに対して *fsuiiant-* 「[専ら] 家畜を飼育する者；牧畜民」(← YAv. *pasu-* 「家畜」=Ved. *paśu-*) は、それ自体決して悪い人間を意味しないが⁵⁷⁾、定住・農耕民に対して遊牧・移動生活を続ける畜産者の意味合いが強く、自ずとゴロアスターの敵視する伝統的社会に属する者として捉えられることが多い⁵⁸⁾。よってゴロアスターの社会にとっては、あくまで vāstriia- であるか否かが重要な要素であったと思われる：Y 31, 10 *aṭ hī aiiā frauuar^otā¹ vāstrīm aṣiiāi fsuiiantəm | ahurəm ašauuanəm¹ ... | nōiṭ mazdā auuāstriiō | dauuqscinā humər^otōiš baxštā* 「そして、この両者 (9 vāstriia- 「農牧民」と yā... nōiṭ aṣṭā vāstriiō 「農牧民でないであろう者」) のうちで、彼女 (牝牛) は選んだ/選ぶ、彼女 [自身] に、畜産を営む農牧民を、真理に適う主人として…。決して、Mazdā よ、非農牧民は、たとえほざいていても (?)⁵⁹⁾、良き覚え (名声) に与ることは無い」(cf. Y 29, 1)。以上を踏まえて元の議論に戻れば、ゴロアスターは自らが崇める「知恵」に、同じ牛馬をもたらず存在であるインドの「智慧」とは全く異なる意味を与えていたことになる。こうした伝統的な (インド的な) 「智慧」との決別は、ゴロアスターが *mazdā-* を人格化・神格化し、男性名詞として

56) *vāstriehiia* (gen.) ... *virāatcā* (abl.) は難しい。訳のように部分の gen.か、或いはインド・イラン的な掠奪部隊の成員である *vira-* (= Ved. *virā-* → 後藤上掲二書同箇所) に対して、「農牧民の男子」であることを強調する表現かも知れない。

57) Cf. Y 29, 6 *aṭ zī θβā fsuiiantaēcā¹ vāstriiāicā θβōr^oštā tatašā* 「というのも君 (牝牛) を、牧畜民のために、そして農牧民のために、形成者は形成したのだから」。

58) Cf. Y 29, 5 *nōiṭ ər'z'jiōi frajiia^otis¹ nōiṭ fsuiientē draguuasū pa'ri* 「決して正しく生きる牧畜民には、決して生き残り [の可能性] は無い、虚偽に従う者たちの間では」。

59) Humbach 1991: II 67 と同様、動詞 YAv. *dauu* 「しゃべる」(ipf. *adauuata*, etc.; Daēuua の存在に用いられる) と理解した。ただし解釈は一定しない、cf. Mayrhofer EWAia II 734。

用いた／改変したと想定することによって、最も整合的に理解することが可能となる。ちょうど彼がインドの *agni-* を捨てて物質的な「火」を男性化して使ったように (→ 2)。

自ら *zaotar-* (Y 33, 6 = Ved. *hótar-* 「火に注ぎ込む者；Hotar」) を自称するように、伝統的な祭官の出であるゾロアスターは、それだけに一層強く伝統文化を否定し、宗教改革を行ったはずである。それは移動・遊牧生活から定住・農耕生活へという、社会・生活全体を巻き込む価値観の大転換であった [堂山 2005: 248f.]。伝統的な概念や言葉を慎重に取捨選択し、残した言葉には、それが重要概念であればあるほど、新たに特別な意味を吹き込んで用いたに違いない [cf. Konow 1937: 221f.]。こうした中で、彼が自分の思想の要となる新たな最高神の名を、一般的な形容詞を使って単に「賢い主人」と呼んだなどは到底考えられない⁶⁰⁾。こうした宗教改革の背景からしても、*mazdā-* は行為名詞・抽象名詞「[[正しい] 決断／知恵」の神格化と考えるのが妥当である。

まとめと課題

本論では Av. *mazdā-* を、Ved. *medhā-* 及び関連諸語彙とともに、語形、語義、語順、そして時代的・思想的背景におけるその意義、という諸点から吟味した。その結果 *mazdā-* は、「注意深い；知恵ある、賢い」等を意味する行為者名詞＝形容詞ではなく、「[[正しい] 決定・決断 (を為すこと)；知恵」を意味する行為名詞・抽象名詞＝実体詞であったことが確認された。本来ゾロアスターはこれを、本来の語根女性名詞から男性名詞へと再解釈または改変して最高神の名とし、称号 Ahura を添えて *mazdā- ahura-* 「主なる [[正しい] 決定・決断／知恵」と呼んだものと結論付けられる (後に *a°m°* 「知恵なる主／Mazdā 神」)。ただし *mazdā-* がどの程度本来の動詞の意味を留めていたのかを、文献から読み取ることは難しい。その一方で、ゾロアスターが伝統的遊牧・掠奪社会を文脈とする PII **mazdā-* に最高神としての位置付けを与えた時、彼がこの語に普遍的、倫理的な含意を新たに持たせたことは疑い得ない。教義そのものが、定住・農牧に基づく平和的・安定的生活と不可分に結びつけていたゾロアスター教社会においては、*mazdā-* は宗教的・社会的に「[[正しい] 決断」「知恵」の総体であり、ゾロアスター教社会の構成員がそれに則って生きるべき「理性」に近い概念であったと推察される⁶¹⁾。つまりゾロアスターは、掠奪や勝利をもたらす伝統的な「知恵」を、共同体における倫理一般に価値転換したと言えるであろう。

本論の考察は、Av. *mazdā-* と Ved. *medhā-* とが様々なやり方で互いに関係し合っている

60) Thieme 1970: 407f.: (Konow の *mazdā-* = 行為名詞の考えを弁護して)「これだけが、ゾロアスターの神の一つの名前、つまり「賢さ」によって呼ばれる存在として理解させ、預言者が自分で高らかに告げた「主人」を、単なる形容詞、つまり「賢い」…によって表現しているなどと信じる必要はなくなる」。

61) 後藤 2004: 57 「主である叡智、理性」を参考にした。ここで使う「理性」には「真偽・善悪を識別する能力」(『広辞苑』第5版)の意味を強く含める。

こと、そしてそれぞれの概念が両者の関係性の中でこそ良く理解され得ることを示している。それは今後の研究のあり方について、新たな問題意識と課題とを提起する。即ち V, 2 での考察は、表面的な言語表現の違いを超えて *Mazdā* と *Agni* との接点（相違点と並んで）存在し得ることを示し、また逆に V, 3 は、表面的な言葉や表現の一致が必ずしもインドとイランの文化の同質性を示すものではないことを表している。従来言われてきた *Varuṇa* との関係も含めて⁶²⁾、両文化に属する個々の言葉や概念を、インド・イラン的伝統を引き継ぐインド・アーリヤ社会と、それに対峙するゾロアスター教社会という観点から慎重に検討すべきであろう。それによって初めて、ゾロアスターの思想或いはゾロアスター教の初期思想は明らかとなり、これに基いて同教の思想の後の発展や教団史もより正しく理解されるものと期待される。

参考文献

- AiG: *Altindische Grammatik* (→ Wackernagel/Debrunner)
 EWAia: *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* (→ Mayrhofer 1992, 1996, 2001)
 Kl. Schr.: *Kleine Schriften* (→ Oldenberg 1967)
 MSS: *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*
 RV: *Der Rig-Veda* (→ Geldner 1951, 1957)
 StII: *Studien zur Indologie und Iranistik*
 Wb.: *Wörterbuch* (→ Bartholomae 1904 または Graßmann 1873)
- AVŚ: Roth, R./Whitney, W. D./Lindenau, M. (Hg.) *Atharva Veda Sanhitā*. 2. Auflage. Berlin, 1924.
 AVP: Raghu Vira (ed.) *Paippalāda Samhitā of the Atharva Veda*. 3 parts. Lahore, 1936, 1940, 1941
 (Reprint New Delhi 2008: *Paippalāda-Samhitā of the Atharva-Veda. Books 1-20*).
 MS: Schroeder, L. (Hg.) *Māitrāyaṇi Samhitā*. 4 Bände. Leipzig, 1881, 1883, 1885, 1886.
 Nigh.: Lakshman Sarup (ed.) *The Nighaṇṭu and the Nirukta*. Delhi, 1920-1927 (Reprint 1967).
 RV: Aufrecht, Th. (Hg.) *Die Hymnen des Rigveda*. 2. Bände. 2. Auflage. Bonn, 1877.
 TS: Weber, A. (Hg.) *Taittirīya-Samhitā*. 2 Bände. Leipzig, 1871, 1872 (= *Indische Studien* 11, 12).
 Bartholomae, Ch. (1904) *Altiranisches Wörterbuch*. Strassburg (Reprint Berlin/New York 1979).

62) *Mazdā* がインドの *Varuṇa* の性質を下敷きにしていることは恐らく間違いない。時にその証左として、(*mazdā* = 「注意深い、賢い」に基き) *Ved. āsura- viśvāvedas-* 「あらゆる知識を持った *Asura*」や *āsura- pracetas-* 「優れて注意を払う A.」、更には *médhira-* 「賢い」や *vidvāms-* 「知者」等の形容詞が *Varuṇa* 等 *Asura* (*Āditya*) たちに使われることが指摘される (Geiger 1916: 213ff, Kuiper 1957: 86)。しかし、これら諸語彙は *Asura* 専用では決して無く (→ IV, 3)、また (*médhira-*以外) 語源的関係の無い、余りに一般的な諸語彙によって *Mazdā* と *Varuṇa* とを安易に関係付けることは控えるべきである (cf. Humbach 1957: 88: *Av. souuišta-* = *Ved. sāviṣṭha-* の対応に基づき *Mazdā* と *Indra* を関係付ける)。

- Delbrück, B. (1878) *Die altindische Wortfolge aus dem Çatapathabrâhmana*. Halle an der Saale.
- Delbrück, B. (1888) *Altindische Syntax*. Halle an der Saale.
- 堂山英次郎 (2005) 古代イランにおける社会組織の再編『国家形成の比較研究』学生社, 232-257
(= 第二部「生産と社会編成」第12章).
- 堂山英次郎 (2011) Mandhâtara の系譜『印度學仏教學研究』60 (1), 293-287 (266-272).
- Dōyama, E. (2013) Indo-Iranian **mans d^hā* — A morphological study —. *Tokyo University Linguistic Paper* 33, 83-98.
- Dōyama, E. (in press 1) Kṣetrasya Pati and Mandhâtara. In: J. E. M. Houben, J. Rotaru & M. Witzel (eds.) *Vedic Śākhās: Past, Present, Future* (= Proceedings of the Fifth International Vedic Workshop, Bucharest 2011).
- Dōyama, E. (in press 2) A syntactic and semantic study of Indo-Iranian **mans d^hā*. In: *Proceedings of the Sixth International Vedic Workshop, Kozhikode 2013*.
- Geiger, B. (1916) *Die Aṃša Spṃtas. Ihr Wesen und ihre ursprüngliche Bedeutung*. Wien.
- Geldner, K. F. (1886, 1889, 1896) *Avesta. The Sacred Books of the Parsis*. Stuttgart.⁶³⁾
- Geldner, K. F. (1951, 1957) *Der Rig-Veda*. 3 Bände. Cambridge (Mass.).
- Gotō, T. (1987) *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen*. Wien.
- Gotō, T. (2000) Vasiṣṭha und Varuṇa in RV VII 88. In: B. Forssman und R. Plath (Hg.) *Indoarisch, Iranisch, und die Indogermanistik*. Wiesbaden, 147-161.
- 後藤敏文 (2004) インド・ヨーロッパ語族 —— 概観と人類史理解に向けての課題点検 —— 『ミニシンポジウム ユーラシア言語史の現在』報告書 上 (総合地球環境学研究所), 34-74.
- 後藤敏文 (2007) *śradhdhā-*, *crédō* の語義と語形について『印度学宗教学会論集』34, 578-561.
- 後藤敏文 (2008) インドのことばとヨーロッパのことば 阿子島香 (編)『ことばの世界とその魅力』, 東北大学出版会, 117-163 (=第4章).
- Gotō, T. (2013) *Old Indo-Aryan Morphology and Its Indo-Iranian Background*. Wien.
- 後藤敏文 (2014) インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える『国際哲学研究』(東洋大学国際哲学研究センター) 3, 43-57.
- Graßmann, H. (1873) *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Leipzig.
- Hintze, A. (2007) *A Zoroastrian Liturgy*. Wiesbaden.
- Hoffmann, K. (1969) Ved. *vidh*, *vin dh*. *Die Sprache* 15, 1-7.
- Hoffmann, K./Forssman, B. (2004) *Avestische Laut- und Flexionslehre*. 2., durchgesehene und erweiterte Auflage. Innsbruck.
- Humbach, H. (1957) Ahura Mazda und die Daēvas. *WZKSO* 1, 81-94.
- Humbach, H. (1959) *Die Gathas des Zarathustra*. 2. Bände. Heidelberg.
- Humbach, H., Elfenbein, J. & Skjærvø, P. (1991) *The Gāthās of Zarathushtra*. 2 Parts. Heidelberg.

63) 電子テキストとして <http://titus.uni-frankfurt.de/texte/etcs/iran/airan/avesta/avest.htm> を援用した。

- Kajihara, M. (1995) The *brahmācārīn* in the Atharvaveda. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 43 (2), 1052-1047 (1-6).
- Kellens J. (1974) *Les noms-racines de l'Avesta*. Wiesbaden.
- Kellens J. (1984) *Mazdā Ahura ou Ahura Mazdā?* *MSS* 43, 133-136.
- Kellens, J. & Pirart, E. (1988, 1990, 1991) *Les textes vieil-avestiques*. I-III. Wiesbaden.
- Konow, S. (1937) *medhā* and *mazdā*. In: S.N. Dasgupta & S.K. Belvalkar (eds.) *Jhā Commemoration Volume*. Poona, 217-222.
- Kuiper, F. B. J. (1957) *Avestan mazdā*-. *IJ* 1, 86-95.
- Kuiper, F. B. J. (1976) *Ahura Mazdā 'Lord Wisdom'?* *IJ* 18, 25-42.
- Kümmel, M. J. (2000) *Das Perfekt im Indoiranischen*. Wiesbaden.
- Lanman, Ch. R. (1877) A statistical account of noun-inflection in the Veda. *JAOS* 10, 325-601.
- Mayrhofer, M. (1992, 1996, 2001) *Etymologisches Wörterbuch des Altindoirischen*. 3 Bände. Heidelberg.
- Mayrhofer, M. (2003) *Die Personennamen in der Rgveda-Samhitā. Sicherer und Zweifelhafte*. München.
- Narten, J. (1982) *Die Amāša Spāntas* im Avesta. Wiesbaden.
- Narten, J. (1986) *Der Yasna Haptaṅhāiti*. Wiesbaden.
- Oberlies, Th. (1989) König Somas Kriegszug — Eine Untersuchung zur Kompositionstechnik der Pavamāna-Hymnen —. *StII* 15, 71-96.
- Oldenberg, H. (1888) *Metrische und textgeschichtliche Prolegomena zu einer kritischen Rigveda-Ausgabe*. Berlin.
- Oldenberg, H. (1967) *Kleine Schriften*. 2 Teile. Herausgegeben von K. L. Janert. Wiesbaden.
- Scarlata, S. (1999) *Die Wurzelkomposita im Rg-Veda*. Wiesbaden.
- Schindler, J. (1979) Rezension: J. Kellens (1974) *Les noms-racines de l'Avesta*. Wiesbaden. *Die Sprache* 25-1, 57-60.
- Sgall, P. (1958) Die Infinitive im Rg-Veda. *Acta Universitatis Carolinae, Philologica* No. 2 (Praha), 135-268.
- Thieme, P. (1970) Die vedischen Āditya und die zarathustrischen Amāša Spānta. In: B. Schlerath (Hg.) *Zarathustra*. Darmstadt, 397-412.
- Wackernagel, J./Debrunner, A. (1896-1930) *Altindische Grammatik*: Einleitung (1896), Introduction générale (L. Renou, 1957), I (1896), Nachträge zu I (1957), II, 1 (1905), Nachträge zu II-1 (1957), II-2 (1954), III (1930), Register (R. Hauschild, 1964). Göttingen.
- Whitney, W. D. [Lanman, Ch. R.] (tr.) (1905) *Atharva-Veda-Samhitā*. 2 vols. Cambridge (Mass.).